

—— 円盤と宇宙哲学の研究誌 ——

日本 G A P ニュースレター

1 9 6 4

5 月 - 6 月

日本GAPニューズレター

— 1964 —
5月・6月号目次

通巻第22号

生命の科学	G・アダムスキー	1
世界終滅の虚説	C・A・ハニー	13
質 疑 応 答	C・A・ハニー	16
ニューズダイジェスト		18
テレパシー講座 4	C・A・ハニー	26
編 集 後 記		33

生命の科学	
1	
G・アダムスキー	

第一課 生命の分析—原因を知ること

この講座は先へ進むにつれて次第に深遠なものとなるでしょう。われわれが生命について話す場合、それはあらゆる面の生命の表現を意味します。はっきりいえば、われわれは生命を探険しようとしているのです。

人間は宗教的または精神的な面を扱う際に、自己の信念の如何にかかわらず他から妨害されてはなりません。われわれが神と呼んでいる創造者は、人間に知られている、または知られていない万物を創造しました。それで全創造物の父を知るためには、人間は父の創造物とその目的を探究する必要があります。

創造者の最高の創造物としての人間はその責任を一任されています。その探究は、画家の名が個人的に知られていないのに有名な絵画の注意深い鑑賞がなされるのと同様です。探究がすすむばすすむほど、ますます人は絵画を描いた本人を理解するようにな

るのです。

われわれは個人的な存在としての宇宙の創造者を見ることができませんので、創造物を通じて創造者を探究しなければなりません。そしてこの創造物がわれわれが自然と呼んでいるものなのです。なぜならそれが「至上なる英知」の具体的表現であるからです。

前述しましたように、創造者がすべてを包容し、現われた創造物が創造者の「因なる英知」から出た「結果」であるために、われわれは創造者を見ることはできません。

人が医師になろうとする場合、人間の目や鼻だけを研究するのはなく、人体の複雑な部分のすべてを研究します。これはあらゆる神経、筋肉その他やそれらの目的、機能などを含んでいます。

医師によっては更に人体を深く研究し、自己の「意識」をもって人体を観察します。(訳注。この「意識」の意味はあとで説明してある)かくて医師は現象の奥にある不可視なものすなわち「因」を知覚します。こうしてあらゆる動脈、筋肉、各機関の目的を知り、各部分がどんなふうにして全身に関連しているかを理解します。そこで一部分が故障するならば医師はその処置法を知るのです。

われわれが自然を知るためにはこれと同じ研究態度を持つ必要があります。そうすればわれわれは、周囲をとりまいていて人間を創造者から分離した実体にしてしまったものもろもの不可解事から解放されることとなります。そのときわれわれは原因と結果を理解するようになるでしょう。われわれの精神的な感覚力は万物とその目的を知覚するでしょう。そしてわれわれは意識的に現象

の奥にある因を理解するようになるでしょう。

ゆえにわれわれは、「意識」の助けをかりて心を発達させるのみならず、同時に意識的な知覚力を拡大させるのです。こうして心と意識が一体化するとき、それを通じてわれわれは創造者に直面することになるのです。

以上が進化した惑星の人間が自己を発達させるのに用いている方法です。

われわれが常に考えねばならぬことは、人間の心または各感覚器官は結果（現象）に頼っているけれども、一方意識はそうではなく、それは結果を生み出しているという事実です。

意識は無言のまま、すなわち印象でもって語りかけるのであって、それは神として知られる、至上なる存在、の言語なのですが、一方心は音響という結果の言語で語っています。

したがってこの第一課は本講座中で最も重要です。読者は結果ばかりでなく原因についても研究しているということを今後の本講座を通じて知らねばなりません。今後本講座を研究するにつれてあなたの研究を完全になしとげるのに必ず、「心」と「意識」の両方を用いるようにして下さい。そうすれば結果とその奥にある原因が一体化しているのを見ることができるようになります。この両方とも楽しい物事を得るのに必要です。

最初このことは容易ではないでしょう。なぜならわれわれはこれまで心でもって研究するように教えられてきたために、想念の奥にある意識すなわち宇宙的な衝動にほとんど気づいていないからです。

しかしこれに気づいて、それがあらゆる物事に応用されるとき

理解力は急速に増進します。そして完全な知覚力が起こるならば、始めは二人の自分が存在するような気がします。心の活動と意識の指令の二つです。

誤りをおかすことを恐れてはいけません。誤りをやったことに気づいたならば、できるだけ早くそれを訂正しなさい。そうしないと進歩の障壁になります。しかしよくよよしてはいけません。それはあなたを用心深くさせるからです。常に記憶しなければならぬのは、失敗は誤った応用の結果であるということで、それによってわれわれは正しい方法を知ることです。

われわれは善とか悪とかに分類しているけれども、そのいずれにしてもあらゆる行為は完全であるということを記憶しなさい。なぜならあらゆる行為はあなたの心、肉体、意識の完全な整合を必要とするからです。したがってあなたは行為と体験によって完全な方向へ成長してゆくのです。

イエスでさえも多くの不愉快な体験を経なければなりません。しかし、寺院から両替屋を追い出したときは一つの誤りをおかしました。「他を審くな」と教えていたからです。しかし誤りに気づいたとき彼は寺院の前にひざまづいて父に許しを乞うたのでした。

現代のわれわれはもっと大きな責任を有しています。なぜなら古代に生きていた人々よりも多くの物事で争っており、多くの誘惑物を持っているからです。それゆえわれわれが生まれた目的を理解し、それを遂行しようとすれば、より大きな注意力と決心を必要とします。

われわれは何かの理由または目的をもって生まれたという事実

に關しては疑問はありません。これが真実でないとなれば人間が存在する必要はないこととなります。

人間の大きな目的は、「宇宙の英知」の無限の表現であるように思われます。他の動物がその可能性を持っているとは思えないからです。しかしこれを達成するには創造物のあらゆる面が理解されねばなりません。そして最低の物から最高の物に至るあらゆる現象を理解する必要があります。

全く等しい二人の人間は存在しません。各人に授けられている異なる才能が相違を生じさせているからです。しかしピアノの鍵盤と同様に、人が各音を学んでそれをたたくならば、それにつれて美しい調和ある旋律が生まれてきます。鍵盤を理解しなければその逆が生じることになります。

そこでわれわれは与えられている能力を知ることによって自己を理解することにしましょう。

先ず、人間とは何でしょう？ 一つの結果である肉体を見るとそれが肉・骨・血液などから成っていることがわかります。この点は何のほとんどの動物と大差はありません。しかし人体を形成している微小な分子は肉眼で見ることができません。無数の細胞で成っているからです。各細胞は独立した存在ですが、一方共通の利益と人体の維持のために全細胞は互いに調和しています。ちょうど地球の三十億の人間が人間界という大家族を形成しているのと同様です。しかし人間は人生において果たすべき役割を教えられないために、混乱が生じています。この人間界の混乱は地球全体の秩序に比較すればまだ小さいほうです。そうでないとすれば地球は大混乱状態になるでしょう。そこでひとつ混乱の起

る原因を調べてみましょう。

一般の人間は、原因の結果であるエゴ（自我）によって支配されている精神労働者です。そして心が学習の過程にあるとき、それは（心は）多くの物質的な結果（現象）によってそれ自体を（心自体を）導きたがるのであって、しかも心が理解していない物事は多く存在しています。理解されない物は恐怖されきらわれます。そして各感覚器官（すなわちエゴの心）にとって楽しい物事は好まれます。しかしときとして好ましい物事は人間を進歩的な学習から妨げる障壁となります。

生命は区別なしにあらゆる自然へ自らを貸していることがわれわれにはわかります。そしてどうやら人間の自由意志が生命の自然な表現から人間を分離してしまつたように思われます。

そこでわれわれは結果を究極の解答とみなさないように、各感覚器官から成り立っている心を調整する必要があります。つまり何らかの結論に達するまでに結果（現象）の生じた理由を忍耐強く分析するとよいのです。それが自我に關連した個人的な結果であるのが他人または他の生命体であろうが何らの差はありません。一例として樹木をとりあげて、それが生きる目的を分析してみましよう。その結果（樹木）を観察しますとそれは生きた木として、また何かを作るための材料として多くの面で役立っていることがわかります。多くの有用な品物が木で作られますし、葉を落とすことによって地面を肥沃にします。しかし人間は樹木から放射されているエネルギーすなわち生命力を見ません。その生命力がなければ処女林地帯に見い出されるような清浄な空気は存在しなくなるでしょう。樹木は炭酸ガスを、生命にとって基本的な必

要物である酸素に変えます。そしてあらゆる植物はこの作業で役立っているのです。

樹木という結果（現象）を観察しますと、樹木を生きものたらしめるべく幹のなかを流れているいわゆる樹液と呼ばれている液体すなわち樹木の血液は、われわれには見えません。また地中深くはっている根や、地中からエネルギー源を吸い上げる際に根が果たしている役割をも見ることはできません。また樹木を形成している細胞群は樹木の目的の遂行の方向へそれを（樹木を）導いていて、その際各細胞は語り合っているのですが、その話し声を聴くことはできません。これらは結果の奥にある「因」と呼ばれてよいでしょう。

さて、われわれは一つの結果（現象）を見るときに、一体となつて現われている原因と結果を見るように自分自身を訓練する必要があります。しかし心は「意識」を通じて原因に気づくようにならねばなりません。あなたの目が一物体をチラリと見る瞬間、意識はその物体の（または生きものの）内部の生命の印象を心に与えるでしょう。そうするためにはイエスがいったように誠実になる必要があります。

心でもって現象が見られ、意識がその原因を洩らすとき、われわれは同時に目に見えるものと見えないものとを見ます。たとえば、あなたが紙の上に図面を描いて家を建てようという計画を始めるならば、意識的な印象によって心にやって来る最初の結果をあなたは生み出しつつあるのです。あなたは一体化した心と意識とに頼りながら設計しているのであって、いわばその二つの道具

とを用いているのです。このとき意識は家のデザインがどうあるべきかについて心に注意します。設計図が描かれた後、あなたは家に関して持っていた経験に従っているいろいろ変更の手を加えるかもしれません。そのときでさえも、あなたが知っている限りの家には存在しなかったデザインのできる部分があることを意識は指摘するでしょう。

これは心の知能的な発達といってもよいでしょう。背後に意識を持たない物で、あなたがやれる物事は存在しません。あなたの心は、心の英知に頼りながら、またはいかにうまく心がその英知の指導に従うかによって変化したり、善かまたは悪の結果をひき起こすように印象を修正したりするかもしれません。しかし良い結果を生じさせるには、心は意識を完全に信用し、心は意識によって導かれるのであることを心自体が認めねばなりません。

「盲目的な信念に従いたくはない」とあなたはここでいうかもしれませぬ。しかしあなたの内部の奥深く自分でやれると感じる物事を達成するには、右の方法を応用する必要があります。

いったい盲目同様な信念とは何でしょう？ あなたが自分の家を設計しているときには盲目的な信念を応用しているのです。なぜならその家はコンクリートやプラスチックによる完成した家としてまだ存在していないからです。あなたが生活で何をなさうともそれは盲目的な信念でもって遂行されます。その結果がどのようになるかは全然わからないからです。歩こうと、車に乗ろうと、その他何をなさうと、あなたはすべてがうまくゆくことを望みますが、確信は持てません。実際われわれの生活の九十九パーセントは盲目的な信念に頼っています。一パーセントは過去の経験に頼

るのですが、それでも過去と同じ結果が生じるかどうかについては、確信は持てません。

信念はあらゆる現象の基礎です。信念のない人はカジまたは船長のいない船のようなものです。ひとたびあなたの心が信念に頼るならば、それは意識の指導に頼ることになり、かくて意識と心は一体化して働くようになります。すると因である神の意識と、結果である人間のセンスマインド（肉体の心）は融合することになります。そして生命の最大の神祕は氷解することにもなるので

す。

意識とは何でしょう？ それは万物の創造者である生命力であるという以外に、だれも的確に知ってはいません。意識がなければ人間は生きものとはならないでしょう。そして人間においては、それを言葉であらわすのに最上の表現は、「注意（または警戒）の状態」といえます。この状態は知覚の状態です。動物においては音響に頼る必要のない「本能」として知られています。意識が用いる言語は、人間がまだ体験しない物事について意識的になる場合に感じるところの創造者の言語です。イエスは次の言葉でそれを表現しています。「見たり聞いたりしないで信ずる者はさいわいである。その者は天国へ入るだろう」この天国というのは、**「因」**の領域、意識すなわち永遠の生命の海を表わすために用いられた言葉です。意識があらゆる現象を生ぜしめているからです。

われわれは荒地のなかのダイヤモンドのようなものです。後になってダイヤモンドと判明する物質をだれかが最初に見つけたとき、本人は肉眼で一個の石ころを見るのですが、そのとき本人の内部の何者かが「この石ころは他の石ころと違うのだ」と語りか

けます。もしそれを切って磨くならば、それはこれまで見たことのない最も美しい物になるという事実の方へ本人を向かわせるのは本人の意識なのであって心ではありません。そのダイヤモンドは考えられる限りのあらゆる色を放射するでしょうが、そのためには忍耐と多くの困難な作業とを必要とします。これと同様にあらゆる人間は荒地のなかのダイヤモンドのようなものであって、自己の純粹さを見い出すまでに削り取らねばならないゴツゴツした多くのごぼごぼがあります。これは楽な作業ではありません。大抵の場合、でこぼこを削り取るたびに何らかの苦痛を伴います。しかし多くの苦痛に耐えることができればそれほど石はますます立派になるのです。

完全なダイヤモンドはその表面につけられた各面から純粹な光を放射します。そしてもし宇宙的な振動が完全に表現されればそこには欠点というものはありません。

生命のあらゆる分野の過去と現在の教えに関するわれわれの思考の習慣は、この削り取らねばならない荒いキズのようなものです。なかには除くのが困難な箇所もあるでしょうが、目的を持つた決意は望ましい結果をもたらすでしょう。するとやがて光沢、すなわち最初は容易でも楽しくもない新しい習慣が確立されることとなります。そしてこのすべてがなしとげられるとき、人間として知られている形態を通じて神の榮光が現われるのです。

転がる石にはコケがつかないといわれています。しかし人間の物質の蓄積に関して引用されるコケは、人間が宇宙的な英知のなかに成長してゆくのを妨げています。むしろ転がる人間は他の石（諸問題）に打ち当たることによって磨かれ、かくてでこぼこが

とれます。

人間の立派な能力の真の美しさはコケで覆われて見えなくなっています。なぜなら人間の見得るすべては、動物のからだに宿っている寄生虫に似たコケだけとなっているからです。このコケとは真実の人間を覆っている人間の各種の習慣を意味します。転がる石が大きさが倍もある岩に突き当たって自己の一部を失ったりしながらも、それは転がり続けます。そしてついには高度に磨かれて、色光や成分である無機物を示します。石によっては、親和の法則によって無機物が互いに結束する場合、美しいデザインが形成されます。

これをなすには長年月を要するでしょうが、忍耐と決意とによって人間は絶えず増大する精妙さとともにこの美を表現することができます。

そこで生命の探究者が先ずなさねばならぬことは、原因と結果、についての絶えまなき知覚力を養うことにあります。そうすれば心は過去に見てきたとおりの形を見るのみならず、形あるものの不可視な支持者について意識に洩らさせるでしょう。それは目に見えない動力発生部のすべてを充分に知覚しながら車を運転するようなものです。

本講座をあなたはただ読むだけではあまり価値がなく、むしろ日常の刻々の実行が効果をもたらします。

第二課 心とその成分

第一課では自動車の動力発生部を充分に意識的に知覚しながら

運転する件について説明しました。

さて今度は感覚器官で成り立っている心なるものを分析してみましよう。このセンスマインド（肉体の心）は実際には絶えざる学習を続けながら創造されてゆく過程にあります。それは結果（現象）の観察から印象類を感受する感光板のようなものです。そして大抵の場合、心のくだす結論は自然の法則と一致しません。心の活動を更によく理解するため、四人の異なる人々のように、それを四つの部分に分けて考えることにしましょう。

最も有力な部分は視覚です。その次は聴覚で、続いて味覚と臭覚という順序になります。「触覚はどうだ？」とあなたはいうかもしれません。それは感覚器官ではなく、心に感覚器官の反応を伝える神経の衝動反応だといってよいでしょう。各感覚器官はそれぞれ別個に働いているのですが、ときとして他の感覚器官と衝突することもあります。たとえば視覚は美しい花を認めるかもしれませんが、それが放つにおいが臭覚にとってきわめて不快なものであれば臭覚はそれを拒絶します。ですから心の統一はすでに破られています。他の感覚器官についても同様のことがいえます。或る感覚器官は何かを好むかもしれませんが、他の感覚器官はそれを嫌うかもしれません。そしてこのことが起こっているあいだに人間の各感覚器官には長いあいだその状態が続いているのです。結果として苦痛と不愉快な状態が起こります。

「二心では何をしてもだめだ」とイエスは言っています。一感覚器官が或る物を好み、他の感覚器官がそれを好まない場合は二心ある状態です。それゆえイエスはあらゆる点で誠実であれと教えています。いしかえれば、四つの感覚器官を奉仕の目的のため

に結束させることであって、審きに利用してはいけないというこ
とです。そしてこれは意識の指導によってのみ可能です。なぜな
ら意識のなかには好き嫌いがなく、しかも意識はあらゆる現象の
目的を理解しているのですが、心はそうではないからです。あら
ゆる現象は先ず意識のなかに描かれて、次に結果の世界へ生まれ
ます。それはちょうど心が意識のなかで描かれて、その着想の結
果として生まれ出ると同様です。だから心が結果（現象）によ
って導かれるのが容易になるのです。そして心はあらゆる結果（
現象）が起こった理由も知識も持つことはなく、好ましい物にも
嫌な物にも判決をくだしていません。

心が楽しい社会を保とうとするならば、こうした勝手な意見を
捨てなければなりません。世の中のあらゆるトラブルはこのよう
にして作られています。そしてトラブルが大きくなってくると、
人々は、目的を持って万物を創造した、全包的な意識“である
神の手にそれをゆだねよう”とします。人々はこの“偉大な英知”
が状況を修正してくれることを望みます。しかし多くの例でその
修正法が示されても人々はそれに応じようとはしません。最初に
誤ちを作り出した心によってその修正法が理解されないからです。
そしてときとして心は最大の抵抗の態度をとり、不活発な状態

となって何もしません。修正によって学びとろうという決意を持
つかわりに、責任をのがれようとしています。神は自ら助ける者を助
けるといわれていますが、そのように、望ましくない結果を修正
し、報いを得るためには個人も何かをなさねばなりません。

センスマインド（肉体の心）の自尊心は苦難に満ちた過程を見
い出すかもしれませんが、感覚人は体験によって学びねばなりま

せん。そしてこれをなすためには本人は感覚器官同志が互いに尊
敬し合うように訓練しなければなりません。現在そうであるよう
に、それらは互いに尊敬感を持たず、そのため人は自己の存在に
尊敬感を持ちません。そのため人は自分を楽しませてくれる人々
以外の他人にたいして尊敬感を持たないのです。

センスマインドが自らを訓練せず、自身を意識に支配させない
ならば、その状態は過去と同様に今後も続くでしょう。

家族が幸福であろうとするならば、家族の各人は自分が尊敬さ
れたいのと同様に、家族の各人をも尊敬しなければなりません。
そして主体となる両親を信頼する必要があります。感覚器官につ
いても同様です。それらは人間の世帯を作りあげている家族のよ
うなものです。したがって各感覚器官も互いに尊敬し信頼し合う
ように指導する必要があります。両親としての意識にたいしては
特にそうです。自ら作りあげてきた多くの習慣に基づいている各
感覚器官を元の正しい状態にもどすのは容易ではないでしょう。
しかしわれわれが天国のような生活を持つとすれば、右のこ
とが達成されねばなりません。生きるための理由を学び、これを
理解する以外に方法はありません。

各感覚器官の訓練

どうすれば各感覚器官を訓練できるでしょう？ 視覚は意識の
一結果であるのですが、もろもろの結果（現象）によって導かれ
ているその視覚なるものは、自分の見る現象の背後にある原因を
探究しようとはしません。しかしこれまでにあなたが第一課を充

分に学びとっていれば、当然、各生物が創造された目的を知ろうという願望が起るはずで、そしてこれは、第二の視覚すなわち意識という視覚をもって結果（現象）がながめられるときに、心へ洩らされます。

教室にいる子供がよい例です。すぐれた生徒は授業時間中に自分の意見を持たないで教師の指導に従います。あとで本人はその授業の内容が正しいか、生活のどの部分にあてはまるかを知るために、与えられた知識を調べます。ところが別な生徒のなかには教師の話す事柄の内容をあれこれと批判し、そのためにその授業から遊離してしまい、要点をのがし、問題についてハッキリした知識を持たなくなり、最初の生徒は教師の教えから利益を得ますが、あとの生徒は得ません。注意深い生徒の場合は聴こうとして心を謙虚にしたのですが、あとの生徒はケンカ腰となり、価値ある要点を失ったわけです。

意識から学ぶために、心は素直な態度で各要点をつかむように自らを謙虚にしなければなりません。というわけは、こうした意識の教えは印象によってのみ伝えられるからです。一物体を観察しようが物音を聴こうが、印象は心とは別個に与えられます。意識は心とは異なって習慣に支配されません。たとえば私が最初に他の惑星から来た人とコンタクトしたとき、私の心は多くの物事、特に私の習慣的な生活と一致した物事を知りたがりました。しかし相手が私の心に印象づけようとした事柄すべてを感受するためには、心をコントロールし、沈黙の状態を続ける必要があります。何が与えられるだろうかと私があれこれ思いめぐらせたならば、その会見の意義をつかむことはできなかつたでしょう。

その後のコンタクトで私が質問をしてよいという特権を与えられたとき、私はそれをやりましたが、どの場合も与えられる知識と衝突しないようにその特権を待たねばなりません。与えられた多くの知識は当時の私の生活態度に適合しませんでした。私は忍耐をもつて、知識を与えてくれる相手を信用しました。最初それはパズルみたいでしたが、ついに全部が組み合わされると、話の全ぼうが明らかになってきました。もし私が短気で、知識を与えてくれる相手をさきぎったとすれば、高貴な宝石を失い、混乱だけを身につけたことでしょう。惑星人の教師にたいして私が子供のようになつたとき、私は多くの特権を与えられ、かつて住んでいた世界のかわりに現在は宇宙の王国に住んでいるのです。意識は宇宙的な教師であつて、私が今までにやってきたようにやるならば、あなたは混乱を持たなくなるでしょう。

多くの人は、なぜ私がこれまでのコンタクトの際にあれこれとこまごました事柄を聞かなかつたのかといひます。しかし私がそうしていたならば、今日持っている知識を私は持たなかつたでしょう。「幼児のようにならなければ天国へ入ることはできない」とイエスはいっています。天国とは因の国です。また聖書には「隠されている物は必ず洩らされる」と述べてあります。

忍耐と信念はこうした報いの基礎です。短気な人は挫折します。また聖書には、人間は多くの才能を持つと述べてあります。そこで、無限なる人間が与えられている才能や、宇宙の計画において人間が果たしている重要な役割を観察することにしましょう。

大ビルディングの工事を例としてあげましょう。このビルが新しいタイプの建築なら特によい例になります。先ず完成した建築

物が意識によって人間の心のスクリーン上に描かれます。そしてひとたび心がその絵を明瞭に見るならば、その建築物のデザインを保持するために、印象類を图示した青写真が作られます。家の設計図を描くときと同様に、これは原因にたいする最初の結果です。そこで青写真は建築物を具体化せしめるために有能な責任者の手にまわされます。するとこの人は建築に必要な職人や資材を調達します。

彼がやとう最初の職人たちはいわば最低の技能者です。なぜなら彼らは建物の基礎を埋めるためのミゾ掘り人夫であるからです。しかしこの人たちがいないことには建物は建ちません。

次にこれを完成させるために多くの技術者が使用されます。その入口の内壁に描かれる壁画は歴史的な事象を表わした美しい絵画で、これが最後の仕上げです。このために最高の芸術家が使用されます。しかしこの芸術家でさえも、使用する塗料の顔料が必要な精製過程において充分に処理されていなかったならば、本人の全能力をもってしても要求される作品を作り出すことはできません。このことは彼が用いる筆その他の道具類についてもいえます。しかもこうした道具がなければ彼の才能は価値のないものとなってしまうです。

ここにおいて最低の能力は最高の能力と等しいことがわかるでしょう。このことからあなたは等しいという言葉が実際には何を意味するかを知らねばなりません。それはその言葉の一般的な定義とははるかに異なります。

これをはっきりさせるために別な例をあげましょう。ソロモン王の神殿が完成したとき、その工事で最も功勞のあったものを儀

式で表彰し、玉座の隣席にすわらせる旨を表明しました。そこで技術者全員がその機会に適当な服を着て出席し、名譽を待ち望んでいました。すると一人の鍛冶工が仕事着のままが入ってききました。鍛冶工場から来たために焼けたエプロンと汚い手を見せていました。しかも彼は自分からすすんで王の隣席にすわったのです。これは一座に動揺を起こし、出席者のあいだに不満の声があがりました。

王は鍛冶工の方を向いて、いかなる権利によって自分でそこへすわるのかと尋ねました。そこで鍛冶屋は立ち上がって他の技術者一同に次のような問を發しました。「あなた方のコテやコンパスはだれが作ったのか?」「それは君だ」とみなは答えました。すると鍛冶屋は続けました。「そんな道具がなくてあなた方はこの神殿を作ることができただろうか?」みなは答えは「ノウ」です。「だったら名譽は私のものだ」と鍛冶屋はいいました。

この平等さは金星や土星で守られています。人間の持つあらゆる能力は創造者から創造物に与えられた贈物として尊重されるからです。そしてそれはあらゆる努力の分野—スポーツ、芸術などの各分野で表われています。地球人が示している競争意識などはありはしません。むしろ神の目的の遂行にたいして個人の能力のすぐれた發揮を求め、氣持を持っています。仕事の達成にたいして名譽を求めるのはエゴ(自我)の心にはかなりません。

イエスは次のようにいってこの真理を人々に伝えました。「自分に榮光を帰するならば、それはむなしきものである」また「明日のことを思いわずらうな」「鳥はまくことも刈ることもしないのに、父は彼らを養っていて下さる」しかしこれは「意識」にた

いする強い信頼を必要とします。なぜならイエスは「命は食物にまさり、あなたがたのからだは着物にまさるではないか」といっているからです。これはすべての金星人が応用している法則です。すでにおわかりのように、いかなる人間でも日常生活においては各人が何らかの形で重要な存在です。われわれがなさねばならないことは、進化した惑星の人間がやっているように、各人の重要さを知ることです。こうして個人の努力は他人に直接または間接に奉仕するにつれて尊重されるのです。

あなたはここでいうかもしれません。地球人の犯罪人や、他人を傷つけたりする連中についてはどうかと。こうした行為は本人の誤ちとみなされてよいでしょう。なぜなら本人は結果（現象）によって自分を導くようにと人々から教えられているからです。だからわれわれはみな誤ちをおかすのです。しかしわれわれが賢明で、理解を望むならば、誤ちをおかした理由を知り、それを修正するでしょう。それで一つの教訓を与えてくれたその体験に感謝してよいのです。この体験がなければ、更により方法がつかめないからです。

歴史は必ずしもくり返す必要はありません。歴史を作るのは人間の行為であるからです。今後これについてはもっと詳細に説明しますが、さしあたって「心」について解説を続けましょう。

われわれはこれまで、心こそは人間であり知る者であると教えられてきました。しかし心は一つの結果（現象）ですから、この教えは真理どころではありません。だが人間の内奥には、知る者が宿っています。もし心が自らを謙虚にして万物にたいする観察者になるならば、心はいかに物事を知っていないかというこ

とにすぐ気づくでしょう。たとえば世の中には立派な人々がいるということに疑問の余地はありません。近年の新しい発明がこれを証明するからです。エレクトロニクスの分野においても、行なわれている物事は奇跡といつてよいでしょう。宇宙空間のはるか彼方に打ち上げられて軌道をまわっているカプセル中の人間と連絡する装置など、こうした業績は人間の心が意識の指導に耳をかたむける際の心の可能性を示しています。しかし現在の人間の持つ知識のすべてをもってしても、人体を製作して生ける人間と同様の機能を持たせることのできる人はこの世に一人もいません。しかし人体の内部には人間を作りあげる知識が蔵されていて、それは子供の出生という現象において日ごとに表示されています。これは無数の他の動物についても同様です。

それゆえ心は学ぶために深入りする必要はありません。心が人体内部にひそむ知識にたいして自らを謙虚にするならば、自分の宿っている人体から何かを学びとることができるのです。ここで「自分自身を知れ。そうすればすべてがわかるだろう」という言葉がどこから起こったかがわかります。あらゆる創造物はこの法則によって支配されているからです。これまで語られた真理で右の言葉ほどに偉大な真理はありません。

人体の創造

妊娠している女は自分の体内に妊娠の状態が起きていることを知っていますが、彼女の「心」は新しい人体の創造について何が行なわれるかを知ってはいません。何度も彼女は「どうなっ

いるのだろうか」と考えます。胎児を生長させている英知を正確に知っている。心はこの世に存在しません。妊娠から出生に至る青写真がすでに作られていることは事実ですが、刻々と新しい人体を作りあげている英知の写真は撮られていません。この英知は人間の心、母親の心などを超越したものです。人間の心は体内で何が行なわれているかを知らないからです。このことは心が或る偉大な英知に従属していることを証明しています。しかし心はこの英知の指導に身をゆだねるならば英知と等しくなる可能性を持っています。

この偉大な英知とは何でしょうか？　ここで再び定義として意識なる語を持ち出す必要があります。というわけは、ときとしてこの意識は、平常は妊婦の好まない或る種の食物をとるようにと彼女の心に印象づけるからです。この食物は胎児の発育に必要なのです。そしてこの英知は妊婦の体内に運動を起こさせます。指示の音が聴こえるわけではありませんが、妊婦の心は或る変化が起こったことを知ります。これは印象によってなされます。なぜなら意識はわれわれが知っているような音響を用いないからです。胎児の創造者すなわち製作者はこの意識であるといえます。そしてこの製作はすべて心とは別個になされます。それでもなお心はやって来る印象類に反対することによって意識と衝突するかも知れません。しかしその食物をとらなければ、不完全な子供が生まれるでしょう。

以上妊婦を例にあげましたが、一般人も日常、意識から心と与えられている印象類を無視していて、避けることのできた多くの不完全な行為を起こしています。これは全く、心が多年のあいだ

尊大になってしまい、その両親である意識にたいして思いを寄せないためです。心は過去の行為によって自らを支持し、前進するかわりに歴史をくり返しています。歴史的な改善もいくつありますが、しかし人間の行為は戦争における人間の抹殺のように、過去の上を一步も出ないで依然として過去に根ざしています。心は意識の指導に従うことによって、毎日清新さをもたらす機会を待っているのです。

心は知識と信念の欠乏によってひき起こされる恐怖を通じて働いています。なぜなら、心は変化しても、次の瞬間にはどのようになるかを心自体が知らないからです。恐怖は心の主人となっていて、何らかの形で地球上のほとんどあらゆる人間を支配しています。恐怖が支配的な要素になっているという事に気づいている人はほとんどいません。これは人間が長いあいだ恐怖という家族の子供であり、それを当然の生き方だと思っていたからです。人間は自分が恐れているということさえ気づいていません。恐怖とは生命を支配する諸法則にたいする理解力の欠乏にすぎません。われわれはこの諸法則を結果（現象）の研究、特に人間の体験の研究によって学ぶことはできません。これらはほとんど恐怖の指令の結果であるからです。

F・D・ルーズヴェルトはこれを次のように巧みに表現しています。「恐怖そのもの以外に、恐怖すべきものは存在しない」恐怖は恐怖を促進するからです。故ケネディー大統領は次のようにいっています。「国家があなたに何をなし得るかはなく、あなたが国家に何をなし得るかが問題である」私ならこういいたいところです。「神があなたに何をなすかではなく、あなたが神に何を

なすのか？」と。神とは人間の意識です。そこで次のようにもいえます。「意識が心に何をなすかでなく、心が意識に何をなし得るかが問題である」

われわれはみな人生を難儀な目にあいながらすごしていています。しかしいまや意識という中央通りに落ち着く時がきています。そして心という側道は避けなければなりません。中心のバランスが生活をはるかに容易にするからです。

この中央通りで万物が創造者の英知を表わしていることがあなたにはわかるでしょう。意識は砂一粒の生命でもあるからです。意識は万物とは独立しているものなのですが、しかも万物を生かしています。それはわれわれが印象と呼んでいる言葉—無言の言語を語っていますが、いかなる音響よりもはるかに大きな力をもって働いています。そしてあなたも私もその最高の現われです。意識がなければ心は無になるであろうからです。

テレビ受像機があれば動く画像が室内で見られるほどに、そしてまたラジオという増幅器があれば空中を流れる音響や音楽を聴けるほどに人間のセンスマインドは発達しています。視覚や聴覚以外の感覚器官でもそうです。しかし意識が肉体を離れたなら、われわれは肉体が死んだと考えます。ところが、人間の心の機能が失われ、感覚器官のすべてがきわめて鈍くなりながらも、意識が存在する限り本人は生きものであるという例があります。これでもって意識は心とは別個に存在し得ることがわかりますが、心は独立して存在することはできません。人間のこの二つの面を考えてみますと、それは一人が他方に頼りながら一軒の家に住んでいる二人の人間にたとえることができます。一方は心で、他方は

意識です。意識は宇宙的性質を帯びていますが、心は世俗的です。世俗的な心は、創造者を伴う一致和合が実現するまでに、宇宙的な意識と融合することを知る必要があります。

その融合をなすためには、あらゆる行為の背後にある原因について心に考えさせる習慣を養うことが必要です。そして各行為が単に過去の体験から来た習慣で、純粹にセンスマインド（肉体の心）の欲望のあらわれであり、自己中心的な行為か、それとも人間が達成しようとする努力しなければならぬ宇宙的な性質のものかを調べる必要があります。

表現されるものが何であらうとも、その表現の生命として意識を心に認めさせ、尊敬させねばなりません。意識は万物や人間を尊敬するものではなく、それはあらゆる行為にたいして自らを貸しているだけです。意識自体は善も悪も知りませんが、その指導の手はわれわれが善と呼んでいるものへ常に差し向けられています。

意識から来る印象類にたいする心の誤った解釈はわれわれに悪い結果を与えます。大体に心は他から指令されることを好まず、自分勝手に行為しています。或る場合の心は、熱いストローに触れるとヤケドをするぞと教えられている子供のようなのです。しかし子供はそういわれることを望みません。そこで手にヤケドして苦しい目にあります。しかし彼はこれがつらい学習法であったにしてもその体験を持つたわけです。

「神の意志」というのはしばしば用いられる言葉です。もしあなたが、意識である神の指導によって学ばないならば、苦しい結果をもたらすところのあなた自身の「心の意志」によってあなた

を学ばせませす。ゆえに神はあなたの体験に責任はないのです。

第一課を学んだ人たちから報告が寄せられています。それによれば、真に熱心な人々は素晴らしい結果を得つつあります。これは驚くべきことではありません。かつて発生したあらゆる物事は意識のなかに記録されていて、人間の心が注意深くなるときにそれが引き出されることがあるからです。

以上が、この哲学がブラザーズによって簡約されて伝えられた理由であり、これまでに出来たかくなる哲学とも異なる理由です。その簡約されたかたちのなかに、研究者に必要な真髓の大部分が与えられています。

創造者の法則はきわめて簡単です。そうでないとすればイエスが「幼児のようになれ」という筈はありません。子供は他を疑わず、純粹です。

これまで人間は自分の心でもってあらゆる物事をあえてむつかしくやってきました。そして神秘に次ぐ神秘を作り出しましたが、実際にはどこにも神秘は存在しませんし、不可能な物事もないのです。

(第二課終わり)



世界終滅の虚説

C · A · H · 二 · 一

一九五四年四月三十日付で次のような手紙が各新聞社宛に送られたことがあります。

「大変な情報が私の手元に入りました。それが真実と認められるならば、それは空想科学小説を顔色なからしむるものであり、この地球上に住むわれわれにとつて最も重大な意味を持つものです。この情報は至急に米国の各新聞社に伝える必要がありますが、その取捨選択については適当に処置して下さい」(ハニー注。以上は七ページにわたる手紙の一部にすぎません)

この手紙はミシガン州立大学付属病院の職員C · A · ラーフエッド博士によって書かれたもので、本人は事件が一段落する前に病院を辞職するように要求されました。

ラーフェッド博士の情報というのは、シカゴの市外オークパークの住人ドロシー・マイン夫人から出たものです。マイン夫人は或る惑星の「サナンダ」と称する宇宙人とコンタクトしたと主張しているのですが、そのサナンダが自分がかつてのイエス・キリストだと告げたというのです。ところがサナンダからマイン夫人に送られたメッセージは、自動書記(訳注。靈界通信に用いられる一方法)によるものであり、一九五四年十二月二十一日に大変動が発生するという内容のものでした。この変動は米大陸の西部沿岸から東部沿岸にまで及び、古代のアトランティスとミューの両大陸が海中から出現するというのです。シカゴ

海中に没し、米国は二つに切断されるともいっています。

このメッセージは、キリストの再来」と、世界の終滅の予言と共に各新聞社へ送られました。マーティン夫人によれば、もとのイエス・キリストであったサナンダはアダムスキー氏が一九五二年にケア州の砂漠で最初に会った金星人のオーソンでもあるという事になっています。もちろんこの情報のすべては大デタラメなのですが、マーティン夫人とラーフェッド博士は盲目的にそれを信じました。

多年円盤問題を研究された方は右の事件を記憶しておられるでしょう。当時それが大々的に報導されたからです。ところでこれについて大抵の人の知らない事実があります。それはミネソタ大学の数人の職員がマーティン夫人一派のグループに何食わぬ顔で正規な会員として参加し、他の会員には知られないようにして右の事件の全ぼうを克明に記録していたという事実です。

この記録は目下ハーバー・アンド・ロウ社から「予言が適中しないとき」と題して出版されています。記事中ではマ夫人とラ博士その他の人物や場所は仮名で登場していますが、内容は事実そのものの記録です。

これまで私は多数の書物を推せんしましたが、右の書は私の意見では円盤問題研究者にとって必読の書であり、私がかれまですすめた書物中では最も重要なものです。なぜなら各種の円盤研究団体がマ夫人やラ博士と同様のケースを体験して、同様な転落の道をたどっているからです。

あなたがこうした心靈勢力の犠牲者にならないために必要な知識を望まれる場合は、ぜひ右の書を読んで下さい。この書はミネ

ソタ大学社会科学研究所の職員レオン・フェスティンガー、ヘンリー・W・リーケン、スタンリー・シャハターの執筆になり、もとはミネソタ大学出版部から刊行されました。

この書に記録された事件が大詰めに近づいた頃、マ夫人の団体の会員一同は各自の財産すべてを売り払い、円盤に救出されるための準備をしていました。彼らは自分の衣服に付属している金属類のすべてを取り除いて（訳注。円盤の磁気で金属は障害になるというわけ）、円盤を待ちに待ったのです。（訳注。しかし円盤のエの字も現われなかった）彼らが結局だまされていたと知ったときの模様を直接に観察した詳細な手記が右の書に掲載されています。会員一同はまじめな人々で、高度に進歩した惑星の人間と自分たちはたしかにコンタクトしているのだと信じていました。メッセージをホンモノだと信じたのです。今日多くの円盤研究グループがこれと同様の誤った状態におちいっています。だまされていたという確実な証拠があがった場合、会員はどうなるでしょう？ そのことは右の書の「実現しない予言とあてはずれの救世主」と題する第一章に述べてあります。

「しかし人間の思いつきのうまさには、単なる信念の防禦から軌道はずれてしまうのである。かりに個人が真剣に何かを信ずるとする。そしてこの信念に一つの理由を持つているとして、そのために取り返しのつかない行動をとったとする。ところがついにそれが誤っているという明白な否定できない証拠を突きつけられて、自分の信念が間違っていたとすれば、どうなるだろう？ 本人はムキになって断固たる態度をとるばかりか、以前にもまして自分の信念の真実性を確信するようになるだろう。実際本人は他

人を自分の意見に改信させようとして一その情熱を示すだろう。反証にたいするこうした反応はどのようにして、またなぜ起こるのだろうか。これこそ本書が焦点をあてている問題である」

自分の信念が誤っていることが指摘された場合、本人の情熱は破壊されるどころかかえってますます高揚することは歴史上の事実です。この理由は右の書で詳述してあります。これをお読みになれば、多くの円盤研究グループや宗教団体が繁榮し続けて、その指導者の信念が誤りであることが指摘されたりインチキ性が暴露されたりした後も団体がますます強固になる理由がおわかりでしょう。だからこれは必読の書なのです。

今日なおもトランス（恍惚状態）または自動書記によって受信されるメッセージ類を信じたり、その指示に盲目的に従ったりする円盤研究団体があります。ときとしてこれは、他の惑星について確固たる具体的な事実を一般へ伝えるための啓蒙運動を熱心に続けてきたわれわれにとってウンザリするような存在です。以下はオーストラリアのGAPリーダーが月刊機関誌に載せた記事の一節です。

「読者はわれわれがサイキック（心靈的）といっている言葉の意味を知るべきである。それはわれわれの立場とはまるで相反するものであるし、政府が依然として調査している円盤問題とは何の関係もないことである。多数の人が、自分の意見で判断すべき事柄を相変わらず歪曲し、宗教的なコンタクト物語を語り続け、円盤に関する心靈的な情報を読めとすすめたりしている。こんな連中はたとえ真実の惑星人の仲間に加わる幸運を持ったとしても、町かどで何か、新しい哲学、を説いているボロをままとった老神秘

主義者になおかつ身をゆだねるだろう」

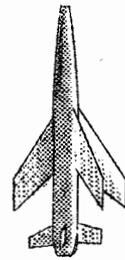
今日いかに多数の人が、前記の書物中に述べられた人々と同じことをやっていることでしょう。その大半は他の惑星から来たと自称する仮空の人間に盲従していますが、その仮空の宇宙人というのは実は地球人の心の産物にほかなりません。現在、仮空の宇宙人として知られているものに次のような名が出てきます。

金星人といわれるエーセリウス、もとはイエス・キリストだというサナダ、火星第六編隊の宇宙総師（見事なナンセンス！）。更にあげれば火星人と称するモンカ、霊媒によっては各種の出身惑星名が出てくるアシユターなどがあります。こんな者は地球人の霊媒の心中に存在するだけです。またコロンドーという惑星から来たと伝えられているコレンディアンと称するイカサマ宇宙人もいます。或る作家は最近自宅のテレビによってコロンドー人とコンタクトしたと主張しています。ところが奇妙なことに多数の人がこの物語を信じてそれを吹聴しているのです。

多くの読者がこれについて質問してきましたので、心靈グループから流されたデタラメな宇宙人名や団体名を次にあげることにしましょう。これはあなたの判断に役立つと思います。

シャスタ山の白光教団、セヴン・レイズ友好協会、アラム・ムル、アラマ・マラ、チョンレ、シエルカ、ラマ・デスカ、レインボウ・シティー、カレン・リ、ヴェレン・ホル、エクサン・デル、リン・エルリ、etc.

質疑応答



C・A・ハニ一

問1 他の惑星に人類が存在するという知識が近いうちに政府から一般へ公開される徴候がありますか。各国政府はこの線に沿って何かを計画していますか。(テキサス州、A・C)

答 一九六四年から一九六七年にかけて多くの新しい知識が公開されるでしょう。これは過去数年間に私の仕事から出た資料を確証する筈です。今年米政府によって出される新しい教育計画を私は期待しています。米航空宇宙局がラジオで短い宣伝活動をやっていますので、この計画の一部はすでに発足しているのかもしれない。その宣伝では宇宙空間と他の惑星への有人飛行にたいする無用論をとりあげてそれに反ばくしており、われわれの促進運動を多数の人に信じさせる方向に動いています。

問2 あなたが出している資料は円盤が実在するという証拠を含んでいますか。あなた自身はその証拠を持っていますか。(ウィスコンシン州、W・G)

答 円盤ならずとも何事に関しても信じない人が要求するような証拠というものには存在しません。この種の証拠は自動車の存在をさえも証明することはできません。提示されるもので、いわゆる証拠として認められるものは実際にはこの世に存在しないからで

す。

法廷において二人の目撃者が或る人を殺人罪で絞首刑にすることはできませんが、どうしたわけか円盤を見た数百の信頼し得る目撃者は信じない人によって疑われています。写真類は認められていません。金属片も認められませんが、個人的な目撃体験も認められてはいません。

もしあなたがこの世の事物について絶対的な証拠と認められる物を何か思いつくことができれば、それを見せて下さい。私は公開しましょう。現在まで、宇宙人を含むあらゆる人間でその「絶対的な証拠」を提示できた人はありません。

問3 米政府は円盤を捕えてそれを子細に調査したことがありますか。(ケアリフオーニア州マンテカ、R・F)

答 私が入手した情報によれば、米国ではこれまでに少なくとも六機の円盤が専門家によって調査されたということです。その結果については知りません。この情報はいままなお政府が極秘にしています。

問4 数千年間ブドウ酒や他の酒類が作られて、人類は昔と同様に現在もそれを多量に飲んでいますが、なぜ人間はこのようなものを飲むのですか。なぜ神は人間がそれを飲むのを嫌うのですか。

答 あなたは先ず一般人にむかって「なぜ酒を飲むのか?」と尋ねる必要があります。相手によって異なる答えが出てくるでしょう。その味を好む人もあれば、気分を好む人もあり、健康増進のために少量をたしなむ人もあります。適当に飲めばアルコール飲料はからだによいこともあり、どの医師もこれを確証すると思いません。

一方、飲酒を気苦勞や責任からの逃避として利用したり、深酒をやったりする人もいます。これは本人にバカげた言動をなさしめるのみならず健康を害します。これは人間の未熟さのあらわれであり、責任感のなさを示しています。

神についての質問の件ですが、あなたは神とは人間の信念や習慣を肯定したり否定したりする、「一個人」ではないということを知覚する必要があります。神とは不可視の力—原理なのであって、肉体を持つ生きものではありません。聖書にはイエスが発酵したブドウ酒を作つて飲んだと述べてありますが、これは過度に飲めば酔っぱらう性質のもので、しかるに聖職者のなかには聖書中のこの記事をねじ曲げて、イエスは単なるブドウのジュースを作つただけで、それは発酵していない甘味飲料にすぎなかつたという人がありますが、これは飲めば酔う筈のブドウ酒の意味で書かれた元の記述を曲解したキ弁です。

これの別な証拠は親切なサマリア人の物語に出てきます。そこでは強盗に襲われた犠牲者の傷口を消毒するためにブドウ酒が用いられています。(訳注。ルカによる福音書第十章三十一—三十四節)それが発酵しておらず、アルコールを含む性質のものでなければ、消毒用に用いられる筈はありません。この物語に出てくる「ブドウ酒」という語は婚礼の宴会の物語に出てくる「ブドウ酒」という語と全く同じです。(訳注。ヨハネによる福音書第二章一—十節)

問5 この地球上で遠からず発生すると思われている大変動についてはどのようにお考えですか。(ジョージア州アトランタ、E・B)

答 大地震、津波、その他の大変動が今後ますます世界中に起こるでしょう。しかし最も疑い深い人が「何か大変なことが発生しつつあるぞ」と気づくほどに変動がひんぱんになるまでにはまだ七年ない十年くらいあります。一九六四年中には多くの自然の変動が起こるでしょう。それで今年は来たるべき大カストロフイ(世界的大変動)につながる現象の出発点であるといつていでしょう。今年から自然界はますます変動が激しくなり、一九七〇年の終わり頃になれば世界的な一大変動の発生時期にたいする推測が可能となつてきます。

(編者注。右はハニー氏の機関誌「サイエンス・パブリケーション・ニューズレター」五月号に掲載された記事で、これに関連してハニーは次のような報告を寄せています)

〇×〇×〇×〇×〇

「アラスカの大地震後に私は(ハニーは)シアトルのNICA P(空中現象調査委員会)のロバート・グリブルから次の報告を受け取りました。

「アラスカ大地震後、当地域の人はみな神経過敏になっていきます。あの大地震は地球の自転軸の急激な傾きによって起こりました。メキシコ湾の変化はそのことを示しています。本日の新聞はテキサス州のヒューストン市全体がアラスカ地震の発生時に四インチ隆起したことを報じております。いまや変動はますます強烈になっていきます」

ニューメキシコ

いまだに円盤は出るといふこと

円盤に官憲おびえる

(ソコロ(ニューメキシコ州)UPI)そこは円盤にとつて絶好の場所なのだ。広漠たるニューメキシコ砂漠のホワイトサンズ・ミサイル発射場の端、世界最初の原爆々発の位置からちょうど三十マイル北方の個所である。

ソコロの警官ロニー・ザモラがそれを目撃したというのだ。警察も軍部も彼の証言を信用しているようである。ホワイトサンズ・スタリオン・レインジの指揮官リチャード・T・ホルダー陸軍大佐によれば「ザモラはきわめて信頼し得る目撃者である」という。ザモラが金曜日(11日)に円盤を目撃したと報告してからホルダーは地区の警察へ召喚された。ホルダーの本部はこの中央ニューメキシコ州の町の付近にある。

郡保安官補ジェームズ・ラキーは「その物体は何か特殊なもので、これまでほとんど人が見かけなかった物だと思ふ」と述べた。「とても恐ろしかった」とザモラはいう。この体験は彼に一つの事柄を教えた。つまり、またそんなことがあったら、金曜日(11日)にやめたのと同じようにやはり逃げ出すということだ。しかし今度こそはだれにもしゃべらないといっている。

一九六四年四月二十四日の白昼、ザモラはソコロから一マイル南寄りの砂漠上で一個のタマゴ型物体を発見したのである。そ

の物体のまわりに生命を持つ形跡はなかった。上昇してゆっくりと飛び去り、やがて視界から消えたというのだ。円盤の近くに二着の白い作業衣らしきものがうごめいているのを見たが、円盤内に人間が乗っていたかどうかはわからない。物体は自動車ほどの高さで、自動車よりも大きくて、きらきら光るアルミニウム状の材料でできているようだった。百ヤード以内まで近づいたとき飛び去ったとザモラは語っている。

アルブクエルクのカートランド空軍基地から二名の調査官が日曜日に現場へ派遣された。その二人、ウィリアム・コナー少佐とデイヴィッド・ムーディー軍曹は現地(12日)でガイガー・カウンタを使用して調査した。異常な物体が存在したという唯一の証拠として草むらが焼けており、地面には四つの小さな穴が残っていた。ザモラによれば、その物体は四本の脚で地上に支えられていたという。草むらが焼けたのは円盤から出た排出物によると推定された。

ホルダー大佐はホワイトサンズと付近のホロマン空軍基地に照会したが、そのいずれの基地もザモラが目撃した物体に比較し得るような物を使用していないことが判明した。政府は引き続き調査を続行するという。(アナハイム・プレティン紙、六四年四月二十六日付)

不思議な物体、なおも調査中

〔ソコロAMP〕ソコロの警官が目撃したというタマゴ型飛行物体を陸軍と連邦検察局が土曜日に調査した。

市警のロニー・ザモラのいうには、このソコロの町付近で金曜日の午後遅く一台の車を追跡していたとき、爆発音らしきものを聞いた。町の一マイル南方にあるかれ谷から百五十ヤード以内に来たとき、そのかれ谷の中にひっくり返った車のように見える物を彼は見つけた。最初の印象では、一台の転覆した車と二人の若者^{若者}のようであったという。

「職工の着るような白い作業衣らしきものを着た二人の人影を見ました。丘の蔭にそれを見失いましたので、更に接近して再度私は車を停めました」とザモラは語る。

そこで彼は物体から二百フィート以内まで歩いて行き、再びブロンという音を聞いた。すると、きらめく白色の金属製の物体（自動車ほどの大きさ）が上昇して地上約二十フィートのあたりで停止し、続いて西方へ飛び始めて次第に上昇して行った。

「私は恐ろしくなりました」とザモラはいった。ホワイトサンズ・ミサイル発射場のR・T・ホルダー大佐はソコロに住んでいるが、発射場及びホロマン空軍基地の代表として現場へ行った。「ホワイトサンズもホロマンも、その当時事件の物体に類似した兵器を使用してはいなかったと私は上司に報告した」とホルダーは土曜日の夜語った。

ホルダーによれば「焼けた現場には四つのクサビ型のへこんだ穴があり（各穴はそれぞれ九ないし十五フィート離れている）、

それらを線で結ぶと大体正方形になる。それぞれ約四インチの深さがあった」という。

調査部長サム・シェイヴズは「たしかに何物かが着陸したのだ」だけだった。連邦検察局は現場へ一係員を派遣したが、あらゆる質問の回答はホルダー大佐にまかせてしまった。カートランド空軍基地の情報官ジム・ハーヴェイは「カートランドでの事件の原因になるようなテストは何もやっていなかった」とアルブクエルクで語った。ハーヴェイによれば、空軍は垂直に離着陸する飛行機を保有しているけれども、それにはコンクリートの着陸場を使用しているという。またクロヴィスのキャノン空軍基地のG・L・レイプ中佐は、キャノン基地は目撃者ザモラの話に合うような航空機を所有していないと言明した。（ザ・レジスター紙、六四年四月二十七日付）

天文学者、円盤に首をひねる

〔バルティモアAMP〕ニューメキシコ州の一警官による円盤目撃事件を調査した著名な天文学者は「まだ解決の手がかりがない」と述べた。

ノースウェスタン大学の天文学部長J・アレン・ハイネック博士は、警官ロニー・ザモラの報告を調査するために先週ニューメキシコ州のソコロへ派遣された。「目下は不可解だ」と博士はいう。「報告者（ザモラ）は信頼できるようだ。もし彼がもう一人の目撃証人を得たか、または映画撮影機を持っていたならば、事件は一日の長さと同じほど確実になるのだが——」

博士の言によれば、特に不思議なのはリーダーが円盤をとらえ得なかったことだという。「ニューメキシコ州にはリーダーが沢山あるのに」と残念そう。同地区のリーダーは地上の自動車をキヤッチできるので、例の円盤が低く飛んでいたのなら当然それもキヤッチできた筈だという。

「私がこれまで聞いたなかでは最もすばらしい物語だ。だがどうしようもない。あの警官をウソつきだとはいえない」と博士は語った。その物の正体については全く見当がつかないという。

ノースウェスタン大学の天文台長でもある博士の話によると、これまでの円盤目撃の報告類が流星のような自然現象であるかどうかを調査するようにとライトパタソン空軍基地から博士は依頼を受けたので、調査したところ、この種の目撃例の大部分は驚くほど簡単な物、たとえば気球のような物の見誤りであることが判明したという。(ロサンジェルス・タイムズ紙、六四年五月六日付)

ドーム型円盤出現す

〔ラスベガスAP〕ラスベガスへむかって車で旅行していた三人のケアリフォールニア州人が、四月三十日に不思議なドーム型の物体を目撃したと報告した。それは飛行機ほどの大きさで、三人がちよっと目を離したすきに消えたという。

フォンタナ出身のガス・ビッグズ夫妻とローレン・アイレス夫人の三名が官憲に語ったところによると、ケア州ベイカリーの西方十マイルの地点、米国ハイウェイ九十一号線から少し離れた丘の

頂上にその物体が着陸しているのを彼らは見た。グロリア・ビッグズ夫人は次のように語る。

「最初一同はそれが給水塔だと思ったのですが、近寄るにつれてまだ見たことのない物であることがわかりました。私と夫と私の母(アイレス夫人)は車が走っているあいだ、そのすべすべした茶色がかったドーム型の物を約五分間見ました。続いて一同がちよっと目を離した瞬間に物体は頂上から消えていきました。頂上にそれがいたという唯一の証拠は、地面に大きなくぼみが残っていたことです」

ネリス空軍基地の係官は、その報告と目撃事件の調査はケア州のエドワーズ空軍基地によって扱われることになるとうやむこ言明したが、エドワーズのスポークスマンは何もいえないと語った。

ビッグズ一家による目撃地点は、五月下旬に予定されていた米陸軍の「砂漠電撃作戦演習」の範囲内であった。

右と同様の型の円盤が先週金曜日にニューメキシコ州ソコロ付近の一警官によって目撃されている。

少なくとも五件に及ぶ類似の目撃事件が、その後数日間にニューメキシコ州の各地で発生しているが、そのほとんどは同州の北部である。一例としてアルブクエルクの東方モリアーティの一人青年が、頭上百フィートの高度を飛ぶ一物体を銃でうった。

こうした事件の舞台は水曜日夜にモンタナ州へ移って、ヘレナの東方にあるキャニオン・フェリー湖付近で一少女が同じような円盤を目撃している。この円盤はニューメキシコのそれらと同様に、地面にくぼみを残したが、それはあたかも着陸ギアが地面にめり込んだかのようであった。(ザ・レジスタター紙、六四年

五月一日付)

ランカシャーの円盤

一九六三年七月二十二日に、英国はランカシャー州のバール市
レッドゲイト車道に沿った荒地のごみ捨て場の上空低く滞空して
いる一個の奇妙な物体を三人の少年が見た。レッドゲイト車道四
二のウィリアム・ホランド(十二才)と二人の友人ポール・ライ
トフット及びキース・カーフットは午後八時三十分頃にごみ捨て
場で遊んでいたが、そのとき空中に一個の輝く物体がいるのを彼
らは認めたのである。

マイクル・ホランドは自分の体験を次のように述べている。「
最初ぼくたちはあの物をずいぶん高い所に見つけたんだ。そした
ら猛烈なスピードで降下したよ。そして高度約七十フィートのあ
たりに停止した。てっぺんには赤いせん光がついていて、警察の
自動車のてっぺんについているやつと同じように光ってるんだ。
最初降下したときはコマみたいにグルグル廻っていたけど、それ
がとまって、赤いライトも消えちまった。みんなが見つめている
と、底の所で何かがスッと引っ込んでネ、潜望鏡らしきものが出
てきて、あたりをグルグル見廻していたが、ぼくたちの方へ狙い
をつけたんだ。するとそれが引っ込んで、その物はものすごいス
ピードで上昇して雲の中へ入ってしまったよ」

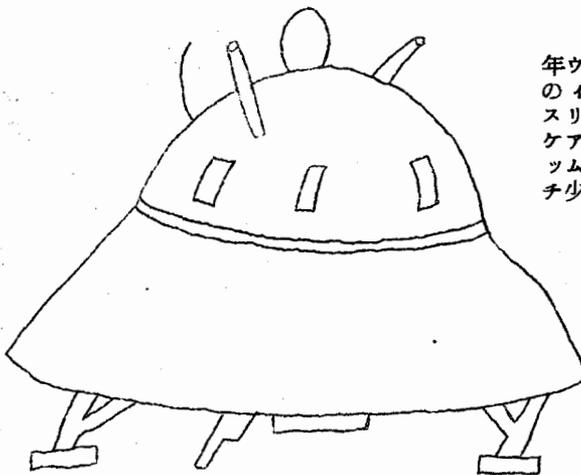
少年が記者に語ったところによると、その物は銀色にキラキラ
輝いていたという。それが突入した雲は異常な色を呈していたが、
彼はその色合いを正確に述べることはできなかった。しかしその

雲は風に逆らって動いていて、その飛ぶ機械は或る距離に達する
までその雲の中にとどまっていた。やがて機械は雲を離れて見え
なくなつた。

最初は疑われた

ウィリアムとその仲間、それまで空飛ぶ円盤と称されている
物の写真や絵などを見たことはないといっている。しかし少年の
描いたスケッチによると、その型はこれまで円盤を見た多数の人
によって描かれた図とよく似ている。

ウィリアム少
年のスケッチ



その少年の両親、
ウィリアム及びマ
ーガレット・ホラ
ンド夫妻が記者に
語ったところによ
ると、夫妻は当初
子供の話を疑って
いたが、息子は明
らかにおびえてい
た。

「はじめに息子
が帰ってきたとき
(その話を聞いて)
笑いたくなりまし
たが、のちにテレ
ビで円盤に関する

説明を聞いてから息子の話に関して私の意見が変わりました」と父親はいう。「息子と仲間たちは明らかに本気です。おまえがもし私たちをからかっているのなら、おまえが笑われるんだぞといひ聞かせてやりましたが、そんなことはない、自分もキースもポールもその物を見たんだといひてきません」マーガレット夫人も、月曜日（二十二日）に子供が家のなかへ走り込んで来たときは明らかにおびえていたと語っている。「顔には色がありませんでした」と彼女はつけ加えた。

少々古くなったこの目撃事件に本誌（フライイング・ソーサー・レヴュー誌）は注目している。一九六三年七月のウィルトシャー州に発生した不思議な「穴あき事件」と関連がありそうな点を見逃がしてはならない。ウィリアム・ホランドの描いた物体は底の中央に突起物を持っているように見える。したがってもしそれが実際に地面に着陸すれば、地面に穴をあける可能性も考えられるのである。ゆえに三本の「脚」がロイ・ブランチャード氏の畑にあの奇妙な放射状の痕跡を残したとみてよいだろう。（訳注。この事件の詳細はフライイング・ソーサー・レヴュー誌一九六三年九月・十月号に掲載されている）

パールという土地は—コリンウォールにも似たような名の場所があるからそれと混同しないように—ランカシャー州セントヘレンズ付近の一教区である。この目撃事件は英国内各新聞の注意をひかなかつたようであるが、一九六三年七月二十七日付の「セントヘレンズ・リポーター紙」に報導された。

十年前、円盤の目撃者たちが見たと称する飛行物体の写真やスケッチ類を發表したとき、疑う人は「本人はアダムスキーの書物

や他の著名な報告類に載せられた図をまねて描いたのだ」といひて相手にしなかつた傾向があつたことは注目に価する。こうした反抗的な声は現在あまり聞かれぬ。これは特に目撃者が年少である場合、一九五〇年代初頭の各種円盤目撃事件は、新聞社の黙殺、一般人の嘲笑、円盤問題に関する政府の隠蔽策などによつて消されてしまつたためである。したがつてセントヘレンズ地区の少年たちがそれまで円盤の図などを全然見たことがなかつたといひるのは先づ間違いない。一九五三年ないし五四年頃ならば、十二才の少年がアダムスキーの写真を見る機会があつたことだろうが—（フライイング・ソーサー・レヴュー誌、六四年五月・六月号）

フェリーニヒングへの路上の夜はふけて

事件の全ぼうが最近明るみに出たのは、フェリーニヒング（訳注。南アフリカ、トランスヴァールの首都）地域の多数の住民がその夜目撃した一つの神秘的な光体について知らせるために警察や新聞社へ電話をかけたときである。調査が始まつた。最初はサボタージュではないかと考えられたが、爆発現象でないことはすぐわかつた。次いで新聞社は「フェリーニヒングとハイデルベルク間の山中へ飛び込んだイン石にすぎない」とかたづけしてしまつた。

だがそのときフェリーニヒングから来た「デイ・ブラントツァーク」紙の二人の友人がわれわれに近づいて、その同じ夜に彼らが体験した事件について語ってくれたのである。「だれもわれ

われのいうことなど信じないだろうが、これは絶対に真実なのだ
—

宣誓陳述

右の二名、W・T・ミューラーとレズリー・イメルマン氏は宣誓官の前で宣誓し、円盤以外の何物でもないと思われる物体の奇怪な行動について陳述した。

この奇妙な物体は、例の「イン石」がマイアルトン付近のカイターシユクローフ上空で見られたのと同時刻に、ポチエフシユトロームの道路上で見られたのである。

「次のように断言しましょう」フェリーニヒング市スリー・リヴァーズ区のレズリー・イメルマン氏はいった。「私は幽霊やおバケ、その他これに類するバカげたものを信じません。だが私が見たその物体は私に大きな感銘を与えました。過去に私は空飛ぶ円盤の存在説を嘲笑したものでしたが、いまは私が笑われる番です。自分でそれを見たからです！」

一九六三年十二月十四日土曜日の朝、イメルマン氏とミューラー氏はポチエフシユトロームからフェリーニヒング市へ車を飛ばしていた。その日の午前一時頃、パリスから十二マイルほどの地点へ来たとき、この不思議な劇が演じられたのである。

イメルマン氏は宣誓陳述で続ける。「私は道路上で雄ジカに似た物を見ました。ミューラー君が車を運転していましたが、われわれは引き返して調べることになりました。ところがそれは途方もなく大きな犬であるように思われましたので、再び車を前方へ向けてフェリーニヒングへのドライブを続けました。

ミューラー君が二度目に車をターンさせたとき、あたり一帯が突然パツと明るくなったのに気づきました。あまり明るかったので地面の石や穴などがくっきりと浮かびあがったほどです。車がアスファルトの道路上をちょうど逆もどりしたときですが、まるで夜が昼にかわったようでした。

すると突然一個の奇妙な光る物が前方に現われて、すさまじいスピードで車の方へ直進して来たのです。車にぶち当たるのではないかと思いましたが、私は無我夢中で外へ飛び出しました。ミューラー君も飛び出しました。車のそばに立ったまま二人はその物体が頭上をかすめ去って空中へ上昇するのを驚いて見つめました」

イメルマン氏の話によれば、その物体は信じられないほどのスピードで飛び去ってから、急にコースを変えてまたも車の上をかすめた。すると車の上空五十フィートばかりの位置でそのものは突然停止し、少なくとも二分間ジッと浮かんでいた。そのため二人は詳細に観察する機会を得たのである。それはまるい物体で、直径は五十フィートばかりあった。「その物はオレンジ色の光を放って輝いており、一方の端に強烈な青い光を放っていて、その光があたり一帯を昼のように照らしたのです」とイメルマン氏はいう。この青い光から長い火のようなシッポが突き出ていて、それが電気の火花のごとき明るい光を放っていた。

「空中にジッと浮かんでいるあいだに、私はかすかなブーンという音に気づきました。熱はありません。私はおったまげてこの不思議な物を見つめ続けましたが、友をひじでつづいて話しかけました。「あれが見えるかい？」「うん。だけど信じられないな」と彼は答えました。

突然それは再びパリスの方向へ急速に飛びましたが、途中でコースをポチエフシュトロームの方へ変えました。しかしまたこちらへ引き返して自動車の上を低く飛び去りました。五、六度物体は引き返し、われわれの頭上をかすめてから遠ざかって見えなくなりました。いっときはその物は車の横に停止したまま道路路上にジツとしていました」

「ねえ」とイメルマン氏は続ける。「私は当初この体験を秘密にしたんです。嘲笑と不信を恐れたからです。しかし翌日の『ダグブリーク』紙にマイアル付近のイン石に関する記事が出たとき、私は公表することにしました。私が見たことに間違いはないのですから」

これがほんものの円盤でないとするれば、いったい何だったのだろうか？

同じ夜、カイターシユクローフ付近の農場の職長ゲーリッケ氏も妙な物を見ていた。彼は乳しぼりの監督に忙しく、牛小屋の入口の所に立っていた。「突然何もかもが月光よりも明るく照らし出されたんだ。上空を見上げると、地平線上を低く飛んでゆく燃えるような物が目についた。するとその光体は分解して四方八方に散ってしまうように見えて、火炎があたり一面にひろがったあと、再び暗黒になったよ。最後にドカンという音が聞こえたナ」

大きな爆音

だがこれだけではなかった！ 一九六三年十二月二十日金曜日に、不思議な光と二つの大きな爆発音がクルーガーシュドルプの数名の住民を眠りから覚ましてしまった。時刻は午前三時頃。ク

ルーガーシュドルプ市のメイン・リーフ通りに住むA・シュトープ夫人が、『ファーダラント』紙に知らせたところによると、その朝東方からやって来る大きな爆音を聴いた。彼女はベッドから飛び出て窓ごしに外を見た。「青い色を帯びたまぶしい光体が見えました。ちょうどだれかが強烈な光体をあちこち振っているようでした。約一分間続きましたが、その間付近一帯は明るく照らし出されました」と彼女は語った。

以上の人々は何を見たのだろうか。『ディー・ブラントヴァーク』紙の調査によって、多数の人が急に空飛ぶ円盤に興味を持つようになり、その実在を信じている事実を発見して同紙は驚いた。多数の住民は実際に円盤を見ているのである。(フライイング・ツィサー・レヴュー誌六四年五月・六月号)

金星に多量の水分を発見、生命存在説高まる

金星に生命が存在する可能性についてこれまで行なわれたあらゆる調査は再検討されねばならない。なぜなら金星上には思いもよらぬ多量の水分が存在するからだ」とジョンズ・ホプキンス大学の一天体物理学者が土曜日(一九六四年四月十一日)に報告した。バルティモア大学の実験物理学教授で同大学の天文気象研究所長であるジョン・ストロングは、金星には多量の水蒸気が存在すると説明した。それによるとその量は地球の大気圏上層の水蒸気の量に匹敵するという。したがって金星表面の温度如何にかかわらず生命の存在について再評価しなければならぬ。

一九六二年十二月に金星に接近したジェット推進研究所のマリ

ナト二号は、金星の表面温度がカ氏八百度であることを発見した。ところがストロング博士によれば、金星に水が存在する証拠は、最近行なわれたロケット望遠鏡装置を持つ大気球打上げの結果判明したという。その調査は空軍の許可のもとにジョンズ・ホプキンス大学の手で行なわれた。金星上の水蒸気に関する問題は、この大気球の打上げによって解決したとストロング博士はいう。多数の天文学者は金星の大気が完全に乾燥していると信じていたのである。

「金星の雲の上層にある水蒸気の量はかなり正確に判明した」と博士はいつている。もし金星上の水全部が均一な層となつて金星上全体にまかれたとすれば、それは数千分の一インチの厚さにすぎないだろうが、そのことがわかれば、この場合いかに正確な科学を必要としたかがわかるだろう。

「だから地上の天文台から正確に水が検出されなかつたのだ」とストロング博士はいう。「現代の観測は地球の厚い大気圏を通して行なわれねばならなかつたので、金星の大気中に水蒸気が存在することをだれも確信できなかった」

今年二月二十一日に行なわれたジョンズ・ホプキンズ大のこの大気球打上げにおいて、一台の望遠鏡が地上八万七千五百フィートの高度まで運ばれたのである。これは極微量の地球の水蒸気をもこえる高さであるとストロング博士は報告した。

この大気球は直径二百フィート（六十メートル）で、三万二千立方フィートのヘリウムを含有している。ニューメキシコ州アラマゴルド付近のホロマン空軍基地から打上げられて、正午に最高高度に達し、四時間そこに滞空した。ゴンドラ側面の各ドアがタ

イムスイッチによって開かれ、太陽感光板によってゴンドラを一定の方向に転じて、望遠鏡が自動的に金星に向けられるのである。数時間後にパラシュートが自動的に開かれて、カールスバッドから六十マイル離れた地点の山中にゴンドラが降下した。

「ゴンドラが集めた情報を分析するのに三週間かかった」とストロング博士はいつた。「結論として、金星の大気圏の上部には多量の水蒸気が存在する。それが太陽光線を反射するのである。金星の雲は水分でできているのであって、多くの天文学者が想像していたようにホコリでできているのではない」（ロサンジェルズ・タイムズ紙、六四年四月十二日付）

（32ページより）感受する理由を説明することにしましょう。次の第五課は特に重要です。なぜなら今日他の惑星から発せられると思われている通信の九十五パーセントは実際にはこの地球上で発しているものであって、それらはニセモノの知識を伝えている事実が指摘されるからです。

大抵の人は何かの特殊な事柄に関しては或る一定のきまりきつた考え方や概念を持っているだけで、通常それは固定してしまつて、容易に変化しません。一般人の心に根深く染み込んでいる考え方や習慣的想念に類似した性質を持つ想念波のみが一般人に感受されているだけです。しかるにそれを感受してもそれが自分以外の他人から発せられた想念波だということに気づきさえしません。それがいかなる問題を含んでも本人はただそれを「別な考えがわき起こつた」と思うだけです。（第四課終わり）

テレパシー講座 4

C · A · H · I

第四課

前回の第三課では磁気と電気について少しばかり説明しましたが、その解説は多くの参考書に述べてある月並みな理論の要約にすぎませんでした。原子力時代が始まって以来、かつて科学界が認めていた概念とは多くの点で異なる新しい理論がとえられていきます。しかしここで忘れてならない重要なことは、月並みな理論が新しい発見によって時代遅れとなっても、或る種の現象の構造を理解するのにきわめて役立つということ。電子その他の物質の性質に関して新しい理論は異なる概念を与えています。電子が粒子か波動か、またはそれ以外の物かは別として、電子が与える影響に関しては興味ある様相を呈しており、その構造如何にかかわらず影響そのものは変化することはありません。

各種のいわゆる心霊現象は電磁気のありふれた理論を応用して完べきに説明することができます。もっと進歩した高度な理論を

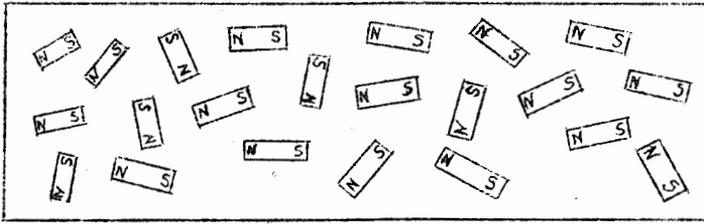
応用しても心霊現象の説明はできませんが、初学者にはむづかしくて理解できないでしょう。そのため私は前回の講座で月並みな理論を解説したわけです。この講座を深く理解された人には、いづれ先へ進んでから、自然のあらゆる物質を構成する分子の眞の性質について、知られている新しい知識をお伝えすることにします。

磁性を帯びた物質の良否

原子核の周囲を電子がどのようにして旋回しているかについてはすでに学びました。一元素の多数の原子が他の元素の原子団と正しく結合するならば、分子となってそれは物質を構成する「ブロック」の役割を果たします。こうして酸素の一原子は水素の二原子と結合して水となります。いわば電子同志が手をつなぎ合つて分子が生じるのですが、この点に関して興味をお持ちでしたら他の良参考書を研究されることをおすすめします。

ありふれた理論によりますと、普通の鉄片中の電子は、各原子に関する限りで勝手な方向にまわっています。また或る原子をその電子団が同一の方向にまわるように置くとすると、その隣りの原子の電子団は異なる方向にまわることもあり、これは一個の原子がその隣りの原子よりも異なる角度をなしているためです。

一個の電子が運動をすると、前回に述べたようにその周囲にフォースフィールドを生じます。良質の磁性を帯びた物質中では、でたらめな方向よりも同じ方向にまわる電子が多いのです。電子団が同じ方向にまわるとき、そのフォースフィールドは互いを整

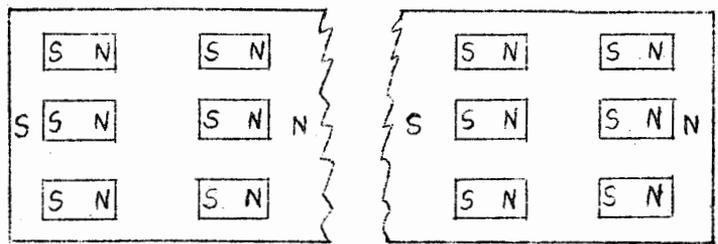


第 3 図

列させて、各電子から生じる個々のフォースフィールドよりも強力な一大合成フォースフィールドが生じます。
 永久磁石中では—もしかかる磁石が実際にあるとすれば—すべての個々のフォースフィールドは互いに助け合い、旋回するすべての電子は同じ方向にまわり、その磁石は周囲に一つの強力なフォースフィールドを示すでしょう。

第3図は磁気がどのように発生するかを説明しています。各電子が旋回する際に生じるフィールドは小さな磁石であらわしてあります。各磁石はN（北極）とS（南極）を持っています。全体の合成フィールドは、個々の磁石が相殺し合うために小であることに注意して下さい。全部の小磁石はそれぞれ好き勝手な方向を向いています。

第4図を見て下さい。そして左右の二片が結合して一つの磁石になると考えて下さい。いますべての小磁石は整列して電子の回転は同じ方向になっていることを示しています。NはSを引き寄せますその結果、個々の小さな磁石よりもはるかに強力な一個の大磁石が



第 4 図

できます。

さて第4図が、左右両片に分離している様子を見て下さい。両片ともSとNを持っていることに注意して下さい。これをどんなにかまく砕いても、やはり個々のかけらはNとSとを持っています。一つの極だけを持つ磁石を作ることは不可能なのです。同様に電磁石の周囲のあらゆるフィールドやすべてのフォースフィールドは相異なる二つの極を持っています。或る種の物質中では、こうした小さな電子旋回磁石を整列させることは容易です。これはその物質を強力な磁場のなかに置くことによってできます。この外部の磁場は、小さな個々のフィールドにバランス点を求めさせようとする吸引と反発の力によって各旋回を同じ方向に向けてしまいます。

或る物質ではこの整列が容易に行なわれぬのがありますが、一度行なわれれば、外部の磁場を取り去っても磁化されたままになっています。こうして磁化された物質は永久磁石と呼ばれますが、これは長期間その物質に磁気が残るからです。もちろん全然磁化されない物質も多く存在します。

軟鉄は磁化されますが、外部の磁場が取り除かれるとすぐに元の状態に戻ります。磁化するのが容易な物質は強磁性体と呼ばれ、さびやすい点が共通しています。

英知ある一大フォースフィールドが万物と全空間に満ちている

第4図で電子の回転をあらわしている小磁石（複数）が実際には小さな銅の永久磁石であると仮定しましょう。そしてそれらをかきわめて接近させたままに置くことにしますが、これは全く一個の大きな磁石にするためです。こんなふうにして無数の小さな磁石をくっつけて並べた上、次第に大きな一個の磁石を作り上げてゆくとしますと、ついには万物の電氣的な性質に似た一個の磁石ができることとなります。

ところがこの中から十個の小さな磁石を取り出しますと、それは十個分の磁場が結合した一個の磁石として作用します。同様にフォースフィールドを持つ各個人はわれわれが宇宙と呼ぶ巨大な磁石の中に位置する一個の磁石にほかなりません。そして個人はまた無数の微小な磁石からできています。これを別なふうにいえば、万物と創造者を一つの巨大なフォースフィールド（英知ある力）と考えるべきであって、そのなかにあつてわれわれは小さな一部分であるということになります。

これを更に説明しなおしましょう。もしあらゆる人間の周囲に存在するフォースフィールド（複数）や、自然界のあらゆる物体の周囲に存在するフォースフィールド（複数）が肉眼で見えると

するならば、第4図中の小さなフォースフィールド（この場合は磁石）に似た状態ですべてが一体となつてることがわかるでしょう。その結果は、人間の心で理解できる、宇宙に遍満した、始めも終わりもない巨大な一つのフォースフィールドとなります。

それは万物や時間・空間のすべてをとりまいています。万物を包含する「全英知」はそのフォースフィールドの一部です。このフォースフィールドは純粹のエネルギーであつて、規定されたパターン（型）に従つて一定の法則（複数）のもとに作用します。これらの法則はいわゆる「普遍的な法則」を形成しますが、そのように呼ばれるのはこれが普遍的に適用されて、われわれが宇宙空間のどこへ行こうともその存在の根拠を見出すからです。

この全包容的な力はあらゆる自然、全創造物をつらぬいています。そしてこれはすべての宗教の基本的な原理である「根本の因すなわち神と同一物です。この力があらゆる電子、あらゆる原子、創造物のすべてを生み出しています。このために「全英知」または神と呼ばれます。聖書ではこの力すなわち「父」は人間には見えない「不可視の霊」となっていますが、われわれはその「結果」を観察したり、それから多くの推論をしたりすることはできません。

想念はエネルギーすなわち力である

さてここで再び想念はエネルギーすなわち力であると申しましょう。ほとんどの人は人体内の神経が電気の回路の針金のような作用を知っています。この神経には実際に電流が流れているのであつて、オシログラフという装置で測定できるし、図

面上に記録することもできます。また脳の専門学者は人間が思考するとき脳中の源泉から発する微弱な電流を記録することもできます。

普通の針金を電流が流れるとき、導体のまわりにはフォースフィールドが発生しますが、これは空間に放射され、適当な装置によってキャッチされます。この方法によってラジオやテレビのセツトは信号を受信します。

この純然たる科学的な原理と類似した方法で、想念も人体から空間に放射され、適当な受信者がいればそれをキャッチすることができます。

か エネルギーを持つ想念波はどのようにして信号を伝える

この想念波がどのようにして信号(情報)を伝えることができるとかを説明するために、再び電気の理論に返ることにしましょう。ここでは電波を想念波にたとえて解説することにします。

ダイヤルの一、〇〇〇でもって番組を放送しているラジオ放送局があるとします。一、〇〇〇というのは放送局が一、〇〇〇キロサイクルの周波数で放送していることを意味します。サイクル^ルにつけられた、キロ^ルは一、〇〇〇を意味しますから、この周波数は一秒間百万サイクルです。ここで何をいっているかはおわかりでしょう。周波数とサイクルの定義です。

電気に関してわれわれは二つの共通の用語を持っています。それはACとDCです。大抵の人はこの用語を聞いたことはあるで

しょうが、意味を理解している人は少数です。DC(直流)は先図で説明したように針金を電子が一方方向に浮動することです。この浮動はいつもマイナスからプラスへと行なわれます。直流の源泉は電池または発電機です。

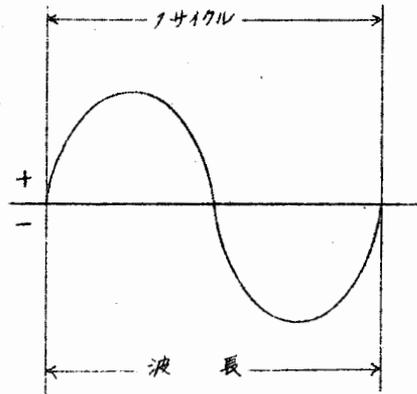
さて電流の流れを定期的な逆にできるように直流回路にスイッチを取りつけるとします。すると始めに直流はマイナスからプラスへ流れて、電流が流れている限り針金のまわりには一定のフォースフィールド(磁場)ができます。ところがスイッチを操作して電流の流れを逆にしてやりますと、フォースフィールドは消滅して電流は以前の方向へ流れるのをやめ、新しい電流が逆に流れて逆の方向にフォースフィールドができます。この新しいフィールドは元のフィールドにたいして極が逆になっていますが、これは電子が針金を逆に運動するからです。

右の説明をよく理解して下さい。定期的にスイッチを入れ換えるならば、針金を流れる電子の方向も交互に変化して、同様にフォースフィールドも出現したり消滅したりします。このようにして針金を交互に方向を変えて流れる電流はAC(交流)と呼ばれています。

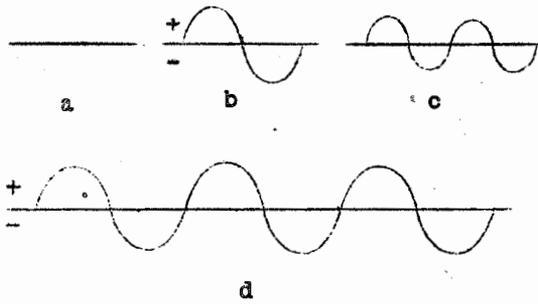
第5図では回路中を交流が流れる場合に発生する運動をあらわしています。

第5図中の水平な線はゼロを、すなわち交流回路中に電流が流れない瞬間を意味します。この線はときとして直流の流れをあらわすのに用いられることもあります。曲線は電流をあらわし、その山型の頂上は頂点を意味します。

第5図中で電流をあらわす線は実際には時計の針が動く方向と



第 5 図



第 6 図

は逆の左廻りに動く点の軌跡であることを想像して下さい。つまり端の方から見ればそれは中心のまわりを円運動を行ないながら回転する点であり、同時にそれはあなたの方へ向かって動いていますが、側面から見れば図のように交流は波型に見えます。第5図にあるように点は三六〇度の完全な円運動を行なってからゼロへ返ります。

さて交流（正弦波）をあらわす波型のいかなる部分をも選び出して、それを元の出発点からの或る角度で描くことは容易です。たとえば〇度においては電流はゼロであることがわかります。すると電流は九〇度の頂点に達してそこからゼロへ返り、今度は反対の方向へ同じ運動を行ないます。そこでサイクル（周波）という語の意味は明らかになってきます。それはプラスの波型一つとマイナスの波型一つとから成るわけです。フリークエンス（周波数）というのは一秒間にくり返されるこの周波の数です。もし一秒間に一周波だけが起れば、これは一サイクルといいますが、一秒間に六十回の周波がくり返されれば、その周波数は六十サイクルです。

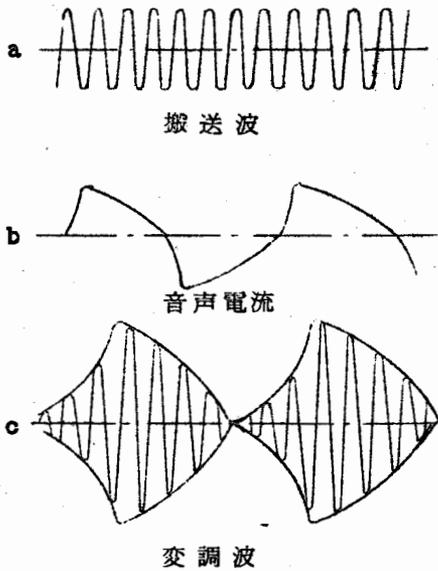
前述のラジオ放送の件に戻りますと、この周波数は一秒間に百万サイクルないし、二百万サイクルということになります。高周波は低周波よりも一秒間に多くの周波数を持っています。現今のレーダー装置では、一秒間に百万の一万倍サイクル以上の高周波を持つものもあります。これからわかるように周波数には制限がなく、可視光線に至るまでには、ほんの大な数字の周波数が多く存在します。そうなるうちに描いたり言葉で表現したりすることはできなくなります。想念波はかかる現象を更に超えたものです。

第6図をごらんになればおわかりでしょう。そのなかのa図は周波数を持たないことを示す線（直流）です。b図は一サイクル、c図は二サイクル、d図は三サイクルを示しています。

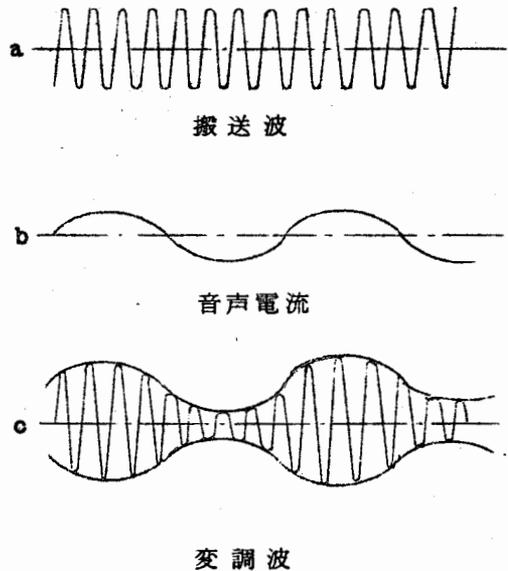
簡単にするために角度その他の説明は省略してあります。われわれはこれを交流と呼びますが、それは電流が一定の周期をもつてその方向及び大きさが交互に変化しているからです。

元の論点に戻りましょう。かかる波動がどのようにして空間へ知的な信号を送り出すことができるのでしょうか？ 次の図はそ

れを理解するのに役立ちます。



第 7 図



第 8 図

第7図をごらん下さい。a図は或る周波数の電波を示しますが、このような純粋な電磁波は搬送波と呼ばれます。送信アンテナから放射されてそれに音声電流をのせるための波動であるからです。この電波の振幅は各周波の強さ（各波型のプラスの頂点からマイナスの頂点までの幅）です。b図は搬送波に混ぜるための音声電流です。次にc図を見て下さい。知的な信号（音声電流）が搬送波に混ぜられると、各周波の強さを変化させますので、振幅は送信される音声電流に足並みをそろえて変化します。

波の高さ、すなわち強さは混ぜられた信号（音声電流）に応じて変化しますが、周波数は元のままであることに注意して下さい。搬送波に音声電流を混ぜることを変調といいます。ここでは搬送波を変調したわけです。いかなる波動でも—想念波でさえも—それに信号を混ぜることによって変調されるわけです。

第8図も同じ状態をあらわしていますが、ただ違うのは搬送波を変調しているのは純然たる交流電流であるという点です。搬送波を百パーセント変調させるかわりに、五十パーセントだけ変調させているのですから、その相違はおわかりでしょう。このことからして、一つの波を弱くも強くも変調できる様子が理解できる筈です。第7図のc図と第8図のc図の各波型（プラスとマイナス）の頂上が搬送波を変調するために用いられる音声電流の波形をそのまま描いている点を見て下さい。

第8図のb図は正弦波交流といわれるもので、おわかりのように上下が同じ曲線を描いています。搬送波も正弦波交流です。ただし音声電流は波型として正弦波をあらわさず、きわめて複雑な形を描きますが、第7図のb図は、混乱を避けるためと理解を容

易にするためにわざと簡単に描いてあります。同時に第7b図と第8b図の正弦波とのあいだの主な相違をわかりやすくするため、第7b図は不規則な波型が描いてあります。

実際には、以上述べた事柄を詳細に説明することは本講座の目的をはずれていますが、読者はこれでかなりおわかりになったことと思います。搬送波は送信アンテナから空間へ放射されます。テレビジョンの場合はあなたが送信アンテナです。この搬送波の強さ(振幅)は、それに混ざるメッセージに応じて周波ごとに変化します。

宇宙空間内の波動

ラジオの電波や、遠方へ通信するのに応用される方法を調べてみますと、あらゆる想念波は宇宙空間内で、周波数⁴または、波動⁵として存在するということを理解するのが容易になるでしょう。ちょうど送信アンテナから電磁波が外方へ放射されるのと同様に、想念波もあらゆる人間から外方へ放射されます。最大の相違は、想念波の場合は送信の周波数がきわめて高いために、高度に発達した人かまたは印象にたいして、感受的⁶と考えられる人以外には受信がほとんど不可能であるという点です。

また電波と想念波のあいだには別な大きな相違点があります。電波は光速(秒速十八万六千二百四十マイル)で進行しますが、想念波はかかる制限を持たないということです。それはいかなる遠方においても時間の遅れなしに同時に到達するのです。

なぜ想念波がスピードを持たない同時的なものであるかについて

ては、いま述べないことにしますが、次のようにいうことはできません。すなわち、「万物を包含し、万物の父性原理(神)」として知られる「英知」は、常にそれ自体の内部に起こる万象について意識的な知覚力を持っている。万象のなかの微小な一個の原子としてのあなたは、この「全英知」の一部です。それはあたかも神が大海であって、あなたがその大海の一滴であるようなものです。あなたはその大海中のすべての物を知るようになる潜在能力を持っています。これが「あなたがたが神であることを知らないのか」とイエスがいった理由です。このことについては後日詳細に説明しましょう。

すべての想念波が同じ周波数を持つとは限らない

ラジオの放送において各局が異なる周波数の電波を出しているのと同様に、人間も異なる周波数の想念波を出しています。或る人の想念波は相対的にいつてきわめて低周波かもしれませんが、その段階に近い程度の発達しかしていない人は容易にそれをキャッチします。しかし前に述べたように、高次の想念波は一般人の段階をはるかに超えていますので、それをキャッチすることは至難です。

一個人の発達の程度は、本人の心がいかなる段階の想念波を感じるかによって異なります。高い発達とは自分の方へ来る高度な想念を感受し得ることを意味します。次の第五課ではこれをもっと深く調べて、いわゆる心靈通信の源泉を究明し、今日多数の人がこの心靈的な通信によるメッセージなるものを(25ページへ)

編集後記

◎ 今号からアダムスキーの『生命の科学』講座を連載します。これは『レバノン』にまさるとも劣らぬ名篇で、ア氏の『コスミック・プレティン』第三号(次号に掲載予定)によりまずと、これを読んで実修した人たちのなかには種々の奇跡が発生しつづつあるということで、今後の成果に期待がもてます。目下編者の手元には第五課まで到着しています。次号には第三課と第四課を載せる予定です。

アダムスキーが円盤研究界で注目的になってから年久しくなり、その間多くの論争が展開されましたが、彼はなおも健在であり、本年五月にはワシントンで講演を行ない、政府関係者に多大の感銘を与えています。また世界的円盤研究誌として最高権威を誇る英国の円盤研究誌『フライイング・ソーサー・レビュー』も依然としてアダムスキーを重視していることは同誌顧問のW・R・ドレイク氏から編者宛の書簡によって察知できますし、過去数年間に同誌に載った十一篇の主要記事中に、アダムスキーの『象形文字』解説に関する記事が含まれていることからみてもわかります。「アダムスキーなんて」と一笑に付することは自由ですが、世界円盤研究界最高の知性の集まりであるフライイング・ソーサー・レビュー誌編集陣の態度に見られる「何か」を考察することも必要であると思います。

◎ ハニーからの最近の連絡によりまずと、その後米国ではニューメキシコ州その他にひんびんと円盤着陸事件が発生しつづつあるけれども、官憲は目撃報告類の隠蔽策に大わらわであるというところで。

◎ 今回は発行が遅れて申し訳ありません。精一杯の努力をしたつもりですが、何かと支障があつて計画通りにゆきませんでした。

加うるに資金難のために会の運営が困難となり、このままでは今後隔月刊として順調に発行できるかどうか、いまのところ見当のつきかねる状態にあります。印刷機購入計画は実現にはるかに遠く、印刷は専門家に依頼してあります。これまでの各方面からの多大な御援助には心から感謝しておりますものの、創刊以来滿三年、国内の数少ない円盤研究誌の一つとして、しかもアダムスキー側の情報を伝える唯一の機関誌としての稀少価値を持ちながらせつかくここまで命脈を保ってきたのに、いま廃刊するのは何としても残念なことです。そこで甚だ恐縮ながら本会継続のための基金としていくばくかの御寄付を仰ぎたいと思ひますが、いかがでしょうか。もちろん真理の伝達は金銭と交換でなされるべきものではなく、望まれる方には無料で提供されるべき性質のものであります。この世界ではいかに高遠な理想主義活動を行なうにしても、およそカネというものがながり不発に終わる仕組みになっていきます。編者自身も収入のある職につけば自費でも出版はできるでしょうが、或る事情のためにしぼくはそれも不可能です。そこで恥をしのんで御援助を要請するわけでありまして、会員諸兄姉の御賢察のほどをお願い申し上げる次第です。一応振替用紙を同封しておきました。(久)

日本GAPニューズレター 1964 5月・6月

翻訳・編集

発行人

発行所

久保田 八郎

日本GAP

島根県益田市益田古川

振替 松江二六三〇

(久保田八郎個人名義)

通巻第22号

昭和三十九年
六月十日発行

頒価一〇〇円・送料二〇円
一カ年分送料共七〇〇円!